

私が夫の故郷に住んでいたのは1988年～89年。何故かコロナパンデミックの頃、そこでの暮らしが次々と甦ってきたのです。目にした光景と出来事の記憶で頭が一杯になり、体から外へ出すという意味でどこかへ表現しないと体が熱くなるほどの熱量でした。

そこで2020年、私が得意とする彫り進み木版画で勢いよく「ある日のこと」を刷り始めたわけです。

制作開始時はすでにインフラが整いつつある夫の村ですが、私が住んでいた時期は、電気・水道・ガスの供給は無く、小さな家には最低限の生活必需品だけがありました。そんな不便で質素な生活が助け合いを生んで人を繋げる……。家族・ご近所・友達・すれちがう人々など、みな血が繋がっているような不思議な感覚が芽生えたのを覚えています。

そして、自然の摂理に逆らわぬ人々と一緒に居て、人間が自然の一部であると気づき気持ちが楽になりました。

言葉も習慣も違う場所でしたが、無理なくそこに居ることができたのです。きっと、私の居場所なのでしょう。

私の居場所での出来事は私のアフリカ生活の始まり。私が生まれ育った国である日本の色名の始まりは白・黒・赤・青。これら4色でカラフルなアフリカ生活を感じ取っていただけたらこの上なく幸せです。

遠藤真理





Mari Endo

ある日のことがいっぱい

2025年8月9日-11月5日

—初めて海外に行かれたのは？

私が初めて海外に行ったのは20歳のときで、ニューヨークだったんです。パンク音楽が好きで、ライブを観たかったです。インターネットはその頃ありませんから。友だちと行きました。その頃はドルが高かったので、成人式の着物はいらないから、その資金をニューヨーク旅行に充てて、と親にお願いして。

—いいですね、格好良いです。

結局、パティ・スミスもラモンズも観られなかったんです。当時、もうなくなってしまったんですけど、CBGBという有名なライブハウスがあって、とにかくそこに行きたくて。出ていたのは別のバンドだったんですけど。

—そこに行けば、それでよかった。

はい。そこでビール飲んで、満足したんです。

—どのくらい行ったんですか？

2週間はいなかったかな。その頃、I Love New York ツアーというのが有名だったんです。そのパッケージで行ったんですが、向こうが組んだ観光名所には興味がなかったで。キャンセル、キャンセルして。ひと通りバスでまわったのは覚えているんですけどね。

—当時のツアーはそういうものでしたよね。

それはそれで面白かったです。あちらの方たちがどういう暮らしをしているのかを見たかったから。すごく小さいパン屋さんがあって。ドイツ人の、かなりご高齢の姉妹がやっていたのを覚えています。

—マンハッタンに泊まっていたんですか？

そうですね、マンハッタン島でしたね。ルーズベルトホテルって言うんですけど。

—その頃から英語は得意だったんですか？

英語は子どもに教えていたんです。アルバイトして。美大は行きませんでしたけど、芸術関係のことはいつも頭のなかにあって、何かしたいと思っていました。それでデザインの学校に行こうかなと思ったら、私は何でも三日坊主なので、どうせそんなところに行っても何ものならないだろうと親に反対されて。反対されると、やっぱり燃えるじゃないですか。

—燃えますよね。

いつもそれが原動力になって。昼間は子どもたちにアルバイトで英語を教えて、夜に桑沢デザイン研究所へ行っていたんです。夜間なので、本当にいろんな人がクラスにいて、それはそれで面白かったです。

—桑沢では、何を勉強されていたんですか。

いろんなコースがありましたが、グラフィックでした。

—どういう人たちがこういう絵を描くんだろう

—アフリカに行くようになったきっかけは。

それもやっぱり音楽で、80年代初期にパンクとレゲエがつながるんですね。それで、ずっとレゲエを聴いている時期があって。レゲエを聴き出すとアフリカにつながるの、アフリカの音楽を聴き出して。

—アフリカ音楽を聴ける機会はあったんですか？

あまりなかったです。そのころ、英語を教えるのをやめて、小さな出版社にいたことがあるんですね。六本木に職場が近かったものですから、いつも六本木のWAVEに寄って。そこだとアフリカのレコードが手に入るの。まだレコードですね。買えなくても、いつもそこに寄ってレコードを見ていました。やっぱり、聴くと音が全然違いますし、リズムも違いますし、それでアフリカにどんどん興味をもって。アートにも興味をもって。こういう音楽、こういう絵を描く人たちはどういう国で育ったんだろうと興味を持ちだしたんですね。

—アフリカのアートの紹介はあったんですか？

ありません。たまたま雑誌に出てくるとか、自分で本屋を探さない限り出てこないんです。だから、メジャーなものしか私は知らなかったんですが、ただ、見たこともないレイアウトとか、モチーフとか、そんなものにすごく興味をもって。

—実際に行ききたくなったんですね。

どういう人たちがこういう絵を描くんだろう、どういう人たちがこういう音楽をするんだろうと思っていたんですね。それで、どうしてもそこへ行ってみたくて。そうやって。その頃、日本からアフリカに入るのに、いちばん入りやすいのがケニアだったんです。本当は、私は西アフリカの音楽の方が好きだったんです。

ナイジェリアとか、セネガルとか、ザイール……いまはコンゴ民主共和国になっていますね。そちらの方に行きたかったんですけど、難しかったんです。

→直行では行けなかった。

行けなかったです。トランジットも一泊とか二泊とか、そんな感じてした。それで、ケニアが入りやすいので、ケニアから入りました。でもアフリカは旅行でちょっと見てまわっても、きつとわからない。旅行者として安宿に泊まって長期滞在するのもいいけど、ほかに手段はないのかなと、『地球の歩き方』を見て。

→もう『地球の歩き方』はあったんですね。

ありました。それしか情報源がなかったです。それで、星野芳樹先生が運営されているスワヒリ語学校があると知って。入学すれば長期滞在できると思って、試験を受けたら受かったんですね。結構すごい倍率なんです。十何人しか採らないので。そこは自慢なんですけど、受かって。入学すると1年間の学生ビザが下りんです。1988年4月にケニアに初めて降り立って。学校の授業は正味半年なので、卒業しても半年ビザが残る。アフリカに来たからには自分たちで何か見つけなさい、という主旨だったんです。その学校



の在学中に、主人に会ってしまったので(笑)、西に行くチャンスがなくなって、ケニアにずっと落ちていて。

→すぐに結婚されたんですか。

やっぱり両家とも反対があってね。それが長かったんですよ。相手が長男なものですから。

→アフリカも家問題があるんですか？

家によりますね。いまは徐々に変わってきていますけど。長男なので家を継いでほしいという希望があったと思うんです。こんな、全然アフリカに関係ないような人が村に入ってきたので、びっくりしましたよね。あちらもそうだし、うちの両親も、あきらめて。それで結婚できるね、という感じで結婚したんです。会って4年後くらいかな。ですから式も挙げてなくて。こちらで言う登記所で結婚の登録をして、正式な夫婦になった。

→ふうん。

登記を予約した日にケニアで大きな暴動があったんです。登記所は街の中心にあるんですけど、真っ白なんです。催涙ガスで。

→行けないですね。

でも、弁護士さんも待っていてくれるかもしれない。その頃は携帯電話もありませんし、連絡がつかない。

→たしかに。それは行くしかない。

とにかく行ってみよう。お店からお店、ビルからビルへ、走って。催涙ガスを吸わないように。

→めっちゃめっちゃ格好良い(笑)。

そうなんです(笑)。それで走りまわって、指定されたところに行ったら、弁護士さんが待っていてくれたんですよ。記念写真を撮るカメラマンもいて、よく来られたね、と褒めてくれて。それでひと通り、サインとか指輪の交換とかして、正式に結婚できました(笑)。すごいはいじまりですよ。

→それはナイロビですか？

ナイロビです。一応、仲人というか証人が必要なんです。証人に来てもらわないといけないから、来てくれるかどうか不安だったんですけど、途中のビルで会って。良かったあ……

→命がけですね。

そんなところに住んでいます。

「ママの山羊は10匹」という歌があるんです

→ケニアはどんな国ですか。

ケニアは部族主義ではあるんですけど、だんだん若い人たちがその隔たりを変えてきているんです。でも、今の問題は貧富の差なんですよ。市のエリアがちょっと違って、ナイロビのなかの西と東で分かれていたり、話すスワヒリ語が違ったり。服装で分かったり。裕福な人が貧しい人をいじめることはないですけど、何かあるごとに階級の違いが問題になっている。

→初めてケニアに行かれた頃は、格差はそんなに大きくなかった？

そんなには感じなかったです。自分があまり気づかなかったのかもしれないけど、今ほどではなかった気がするんですけどね。

→都会と地方の格差は？

それもあります。部族ごとの習慣や考え方の違いもあるので、画一化していない。みんなバラバラという感じがですね。

→難しそうですね。

でも、いまの人たちはクリエイティブです。YouTubeとかTikTokとか、みんな見られますから、見よう見まねで自分のものにして。今まではただの真似で、それが自分のものになっていなくて、やっぱりできないな、と思っていたんですけど、最近は何のすぐスター性のある人がたくさんいて。

→テクノロジーが進化して良くなった変化ですね。

そうですね。オリジナリティに欠けることが多いので、そこらへんを気をつけてくれれば、才能がある人はたくさんいますね。

→ケニアのオリジナリティという意味ですか？

そうです。アメリカのラッパーの真似してるな、とか、そういうことを感じさせない。真似していても、その曲や歌い方を聴いたらあの人だって思えるような、そういう人たちがたくさんいるので。

→音楽のお仕事もされていたんですか？

仕事はしていないです。ただ好きで、そういうコーディネイトしてただけで。ボランティア的に。



→ミュージシャンの方を呼んで、泊めたりとか。

はい、日本から。

→日本の音楽がケニアでどう受け入れられるか、想像がつかないです。

それもメジャーなミュージシャンじゃなくて、インディーズです。日本でも大きな会場でやったりする方たちではなくて、地道に小さなライブハウスで、でもすごい人気のある方たちなんですよ。最初に呼んだのは、ふちがみとふなという夫婦のデュオなんですけど。ふちがみがボーカル、プラス、鳴り物ですよ、おもちゃの鳴り物。ピアノかです。で、ご主人のふなとさんがジャズのベーシストだったんですね。そのふたりが歌われているんですけど、ふちがみの方は、スワヒリ語学校のクラスメイトなんです。

→そうなんですか。

ふなとさんの方は、ナイロビでお会いしたことがあります。ふたりとも存じあげていて。ふたりの歌を聴くと、笑ったり泣いたり、じわっとする歌が多いんです。CDもたくさん出しています。実は、作品集の表紙に選んだママと10匹の山羊の絵は、私の方が先じゃ

なくて向こうが先なんですけども、「ママの山羊は10匹」という歌があるんですよ。一度田舎に来てくれたんで、ママに会っているんです。

一その体験をモデルに歌をつくられた。

そうなんです。それをライブに歌われちゃうとジーンと来て、いつも泣いちゃったりして。すごくいい歌で。ふちがみとふなとさんのファンの方も、私の個展にたくさん来てくださいます。ふちがみさんが宣伝してくださるみたいなんですよね。山羊の絵が出るよって。本当に来てくださって。その歌のなかに、村と街を行き来するバスが出てくるんですけど、私は意識してなかったんですけど、それも作品になっているんですね。ファーマーズチョイス号というバスを彫っている。ふちがみとふなとさんと私の作品は、結構つながるところがあるんです。

こんなに面白い技法があるんだと思って

一彫り進み版画について聞かせてください。

私は日本で出産したんです。それで、上の子が6歳、下の子が2歳のときにケニアに戻ってきたんです。そのときはキスムではなくて、ナイロビに住んでいました。ケニアは、子どもの学費が結構高いんですよ。それで日本の企業でずっと働いていたんです。ずっと忙しかったんですけど、何か芸術的なことをやりたいと思って。家では絵を描いたり、そういうことはしていた



んですけど、ナイロビに芸術家村みたいなところがあって。クオナ・トラストと言う名前でした。クオナとは、スワヒリ語で「見る」という意味で、その頃はトラストだったんです。運営されていたのは白人の方だったんですけど、いろんな種類のワークショップを盛んにされていて。広告に、リダクションのウッドカットプリントと書いてあって。木版画って、私は日本で真剣にやったことがないですから、ちょっと行ってみようと思って、ワークショップに行ったんですよ。先生はジョン・シルヴァーという方で、それはアーティスト名で、ケニア人なんですけど。ほかに何人も生徒さんがいて。そこではまっちゃったんですよ。こんなに面白い技法があるんだと思って。インクは印刷物を刷るためのインクですから、印刷工場から調達するんです。

一多色刷りですよ。

そうです。普通の水彩木版だと、色ごとに版を変えて重ねますが、彫り進みの場合、版木は一枚だけで多色刷りをするんです。

一多色刷りは色の数だけ版木があるイメージですけど、なぜ、二度と刷れない版画なのでしょう。

色を変えて刷るたびに彫る部分が増えていくので、一枚の版木の形状が変化してしまうからです。発明したのはアメリカの方だという説もあるし、日本の方だという説もある。ピカソもやっていたそうです。

一そうなんです。一回限りの版画というのは、刹那的ですね。

プレッシャーもあるし、すぐスリリングで、失敗しちゃっても……いや、失敗がない……ないことはないんですけど、絶対これはダメだっていうのはありません。間違ったら、その方が良かったです。わざと間違えたりすると面白くないんですけど、本当は前の色で残さないといけないのに削っちゃった、とか。

一計画通りにつくるのではない面白さでしょうか。

そうですね。もちろん、計画通りにもできるんですけど。

一下絵はつくるんです。

下絵はすぐグラフです。ここに赤が来ればいいのか、すぐグラフな鉛筆画を描いて。どうしても厳密に版木に写したいときは、きとんとした絵を描いて、それをトレーシングペーパーに写して、版木の上にカーボン紙を敷いて、下絵を写して、それから彫り出します。

一思わぬ方向が進んでいくところが、彫り進み版画の魅力なんじゃないかな。

その通りです。いまは版画教室をやっているんですけど、みなさんそれをすごく楽しんでいる。最初は、先生間違えた、とか言うんですけど、いや間違いじゃないから進んでみないかなと、あ、こうなっちゃって面白くなって。本当に、間違いのない、間違いを楽しめる版画教室で、賑やかにやっています。

一ワークショップに参加したのは、何年頃ですか。
たしか2007年だったと思います。
一けっこう最近ですね。

一ワークショップが終わっても、先生について、土日とか先生のスタジオに通って刷っていたんですよ。

一最初からアフリカの生活がテーマでしたか。

いえ、動物が多かったです。アフリカの生活は、「ある日のこと」が初めてです。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。



一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

一「ある日のこと」は、新型コロナウイルスの流行がきっかけでつくられたんですよ。

真っ当です。しかもケニアというのは意外性がある、彫り進み版画という方法も面白いです。

最初は説明文もついてなかったんです。一視覚的に見せるつもりだったんですね。

楽しかったんですよね。最初は止めようかなとか思ったのに、止まらなくなって。

村はカルチャーショックシリーズでした

一キスムで暮らしていたのは、まだお子さんが生まれる前でしたか。

正式に結婚してなくて、子どももいませんでした。一でも、相手のご家族といっしょにいらっしゃった。

はい、最初はいっしょにいて。ただ、主人の部族の風習で、結婚していないから外に出なさいと言われて、村から出た時期もありました。その時期の街の様子も、後半の作品に入っています。

一なるほど。

村の生活は本当に面白かったですね。

一ナイロビとは違った。ナイロビは都会ですよ。

都会です。もちろんその頃は、物資が少なかったんですけど、暮らせないことはなかったです。ガスも電気もありますし、そんなにカルチャーショックはなかったんです、私にとって。だけど、村はすごかったです。カルチャーショックシリーズですね。

一笑



いちばんのカルチャーショックは、村のおうちに着いた途端に、義理の妹たちが私のポストンバッグを開けて、アクセサリを身につけはじめて。もう泣いちゃったんですよ、最初は本当に。作品の説明文には軽く書いていますが、何でもこんなことされるんだろう、とかね。

一身ぐるみ剥がされた感じがですね。

そうなんです。あれはショックでしたよ、本当に。いちばんのショックですね。あれがあったからスバツと割り切って、これ私の、ということではなくなったので。それはそれで、すぐ気持ち楽になって。

一そうですか。

本当に面白かったですね。

一外から来た人だからルールが違うんだ、という認識はなかったんですね。

ないんです。ルールが違うということも意識してないんです。自分たちと同じように扱ってくれた。

一それは良い面もありそうですね。

1日目からファミリーだと思ってくれて。村ですから、スワヒリ語も話せなくて、部族語を話すんですけど、わからない言葉がまわりにあっても私は全然気にならなくて、音楽みたいに聞こえていた。仲間外れという気持ちもなかったし。私は何も参加しなくても、そこにいて、みんながああだこうだと言っている姿を見ているのは、ものすごく楽しかったです。

一観察している感じがですか。

観察もしていましたし、ただそこに何も考えないでいるという心地よさがありましたね。

一日本は、まわりのことが分かり過ぎる感じがですね。

それはありましたよね。いろいろ見えちゃうし。

一嫌でも見えちゃうし、耳に入ってきたし。

だから村の生活は本当に面白かったですね。義理の母も真剣に私のことを怒ってくれましたし、それはありがたかったです。



家族の肖像 2025年 彫り進み木版画、紙にオフセットインク 300×300mm

何でも問題ないって言うんですよ

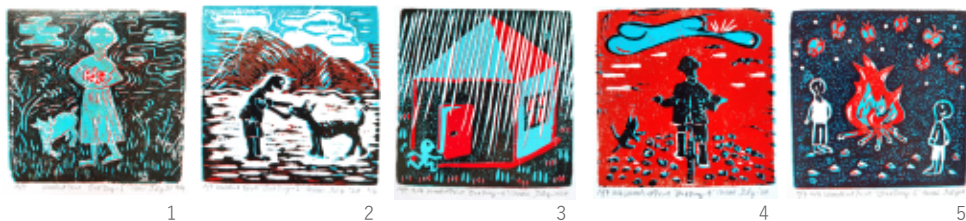
一日本に帰りたいという気持ちはなかった。

両親には申し訳ないけど、そうなんですよ。経済的には先進国が後進国を援助する図式があって、日本もケニアを援助していますが、私は経済的な援助とは別に、精神的には本当に彼らに援助されるというか、いてくれるだけで気持ちが楽になれた。何でもこういう人たちに見守られているんだろうって。やっ

ぱり微笑みなんですよ。あの微笑みは心からの微笑みで、わざと笑っているわけではなくて。すごく自然な微笑みで、それを見ると……。それで、何でも問題ないって言うんですよ。問題すごあるのに。

一なるほど、なるほど。

でも問題ないって言われると、本当に問題なくなっちゃうんですよ。そういうのがすごく楽なんですよ。本当かどうかわからないんですけど、世界親切ランキングというのがあって、ケニアが1位なんですよ。



一本当ですか。

ケニアは1位で、日本はすごく下の方にある。

—わかるような気がします。

本当に、ちょっと困っていると、そこらへんを歩いている人が寄ってたかって世話してくれて。どうしたのって。気をつけないといけないときもあるんです。でも、一人じゃないっていう、安心感があって。知らない人でも、何かあったときに助けてくれる。気持ち的にね。

—それは救われますね。

ケニアは、普通の家庭にお手伝いさんがいるんですね。お手伝いさんの家にもお手伝いさんがいる感じなんです。それはとても大事な人たちで、彼らの経済的な支援にもなりますし、本当に私たちは助かっているわけです。お手伝いさんとか庭師とか、やっぱり仕事の面でも階級がありますから、下の方にいるんですけど、そういう方たちの言葉とか微笑みとかが、いちばんの助けになるんですよ。彼らはすごく貧しい生活をしているんですけど、どうしてそんなふうに考えられるんだろうと思うくらい、勉強になるようなことを言ってくれるんですよ。困った顔しているとね。すごく励みになります。

—それはナイロビの話ですか。

ナイロビです。

—都会も地方も関係がない。

そうですね。だから、別のシリーズで今度は……

「ある日のこと」は赤、青、黒ですけど、別のシリーズでは黄色、緑、茶色で、「大丈夫シリーズ」というのがあるんですよ。その人たちを見ると、私が大丈夫になる場面とか人とかを選んで、「大丈夫シリーズ」ですね。

—へええ。

今は本当に物も増えて、施設もすごく充実していますし、安全面だけ気をつければ、本当に暮らしやすいと思います。ですから、私みたいに好きでケニアに行った方は、もちろん楽しめるんですけど、駐在とかでご主人について行かれたご家族も、すごく楽しんでいらっしゃる。

—日本の方も多くいらっしゃるんですね。

いらっしゃいますね。2003年までは、かなり日本の企業があったんですけど、2003年にODAの問題があって、日本の企業が撤退した時期があるんですよ。すごく少なくなって、また盛り返して。いま盛り返しているのは、企業もそうなんですけど、若い方たちがアフリカで起業されるというケースがあって、それが今までと違う。みなさんアフリカに目を向けて、飲食系とか、衣料関係とか、いろんなビジネスをされています。

—いいですね、大企業だけじゃないのが。

ええ、そのへんが今までと違うところで。

—私は、山崎豊子の『沈まぬ太陽』の印象が強くて。

そうです、そうです。

—JALの話で、ケニアが舞台に出きますよね。



ところどころ、存じあげている方が登場されます。

—ああ、そうですか。

本当に楽しい国です。アフリカを好きな友人が、飛行機のなかで具合が悪くなっちゃったんだけど、ケニアに着いた途端にすごく気分が良くなって。もしかしたら、ケニアの磁場がそうさせたのかもしれない。特に彼女は敏感な人なので。

—解放感があるのでしょうか。

みんなバラバラなので(笑)、居やすい。本当にNo Problem。

一生でも終わらないかもしれない

—「ある日のこと」シリーズは、そんな大らかさにあふれていますね。

いまは64番まで来て、一応そこでまとまってはいるんですけど、ときどき、あ、これ刷り忘れていた、というのがチラチラと出てくるんです。

—じゃあ、まだ完結ではない。

完結じゃないかもしれないです。

—いまの生活を作品にすることはしないのですか。

それをやったら、一生でも終わらないくらい。絵だったら何点でも描けるかもしれないですけど、この技法だと……。色と色との相性もあって、一点つくるのに三日かかっているんですよ。あんまり色が混ざり

合うと、濁っちゃうんです。潰れちゃうんです。ですから一色目が少し乾いてから、二色目を重ねたりしているんで、小さくても三日かかっているんです。

—時間も必要なんですね。

大きさが10cm×10cmなので、すぐに彫れちゃうんですけど、時間はかかる。

—だから同じ時期にいくつもの作品があるんですね。ひとつ刷って、乾かして、そのあいだに別の作品を刷るわけですね。

はい、それはできます。

—ケニア以外のアフリカの国には行けたんですか。

日本の企業に勤めていたときに、出張でウガンダ、タンザニア、ザンビア、エチオピア……

—割と周辺国ですね。

最後の出張がモザンビークでした。企業では、最後、定年になったのがタンザニアだったんですよ。2年間タンザニアにいました。タンザニアもすごく良いアーティストがたくさんいて。そこにもアーティスト村があったので、ときどき行っていました。私が100%版画家として活動しはじめたのは定年後なので、まだ未熟な……

—では、デビューが早かったんですね。

最初に彫り進み木版画のワークショップで教えてくれたジョン・シルヴァー師匠と二人展をやったのが2015年でした。そこから数えると10周年になります。





—キャリアとしては若手ですね。

若手なんですよ、実はそうなんです。

—それまでに記憶の蓄積があって、活動がはじまるのが良いですね。

3、4年くらいたってからかな。やっぱり自分には才能がないし、人付き合いもあんまりうまくないし、これじゃ版画家としてやっていくのは難しいだろうと思って、一度やめようとしたことはありました。やめてどうするのって、いつも問いかけていて。やろうと思っていたいろんなことをやめて、版画を続けてきたのに、いまやめたら何もならないと考えて続けていたら、こうしたお話が来たんですよ。

—手法と表現されているものが一致しているというか、意味のある方向に進んでいる気がしますね。私は才能のことは、あまり考えないですけど。

すごく落ち込みましたよ。グループ展の声もかからないし。やっぱりケニアの人じゃないから。仲間外れにされることはないんですけど、声はかけられにくいし。私もケニアの人に活躍してほしいし、経験はともかく年齢的にも、え？って感じになっちゃうし。

—立ち位置が難しいですね。

そうなんですよ。

—ケニアでも発表は？

しています。実は、ケニアでもたくさん展覧会に呼ばれるようになってきて。

—それは素晴らしい。

すごく嬉しいんですよ。ケニアの版画家のリーダーのような人がいて、彼がグループ展になると、いつも声をかけてくれるんです。日本人とかそういうのは全然関係なく、版画家として仲間に入れてくれる。

版画教室の生徒さんの展覧会をやったんです

—ケニアは版画が盛んなのですか。

版画をするアーティストは多いです。有名な人が2、3人いるんですけど、その方たちに憧れて、とか。

—木版画が盛んなのですか。

木版画です。やっぱりコスト的にいちばん安くあがる。材料も安く手に入る。

—工程が複雑ではないのも木版のメリットですね。

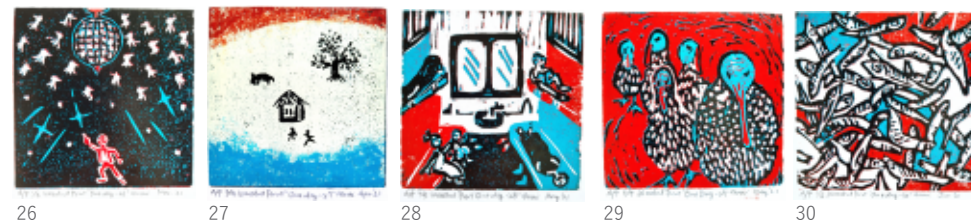
銅版画をやっている方もいるんですけど、その方はヨーロッパでもかなり有名な方なんですよ。

—ほぼ手作業で完結するのが木版画の特徴。

私との違いは、みなさん大きな作品なんです。私の図柄に興味をもってくださる方はたくさんいるんですけど、でもサイズが小さ過ぎますって言われて。

—大きい方が良いんですね。でも木版画は体力が要りますよね。

私惜しくて、60cm×60cmの作品をつくったことがあります。一部彫り進んで、そんなに色を使わない



で、古い紙を使ったりして、全然違う作品にしたんです。でも私はプレス機を持っていないので、床の上に紙を敷いて刷っていたら、腰を悪くしたんですよ。作品ができたらずごく嬉しいし、楽しいので続けるんですけど、体力がないときは、やりたいけど、この感じだと無理してやらない方がいいなって思ったりして。

—そうですか。

6月に木版のグループ展があるから出してと言われてるのがあって、大きいのを出します。小さいのをまとめて展示してもいいんですけど、そこまでは私は指示ができませんので、大きいのを出します。

—良い機会になりそうですね。

5年目に入るのかな、私が続けている彫り進み木版画教室も、生徒さんだけの展覧会をやったんですよ。作品が80点くらい集まったんです。額装したらたいへんなので、私が厚紙でマットみたいなやつをつくって。次女も絵描きで、彼女のスタジオを使って木版画教室をしているんですけど、本当に小さなところで、80点くらい展示して、去年の10月に2日間やったら、すぐ売れたんですよ。価格が安かったこともあるんですけど、価格は生徒さんに自分で決めてもらって。1000円とか、2000円とかね。1万円という人もいて、それも売れたんです。ケニアのアーティストたちが、たくさん観に来てくださって。こういう展覧会は初めて見るから、本当に刺激になりましたと言ってください。

—へええ。

ケニアの展覧会って、オープニングにしか人が来ないんですよ。

—そうなんですか(笑)。

社交の場。

—作家さんがいるから来るという感じがですね。

そのあとは誰もいないんです。私、銀座では毎日個展の会場にいましたけれども、ああいう必要はないんです。でも私、銀座でギャラリーの方の動きを見ていましたので、それを真似て、2日間、ずっと会場にいて、どんどん売れて、生徒さんもすごく喜んでいましたし、私がいちばん嬉しかったですね。

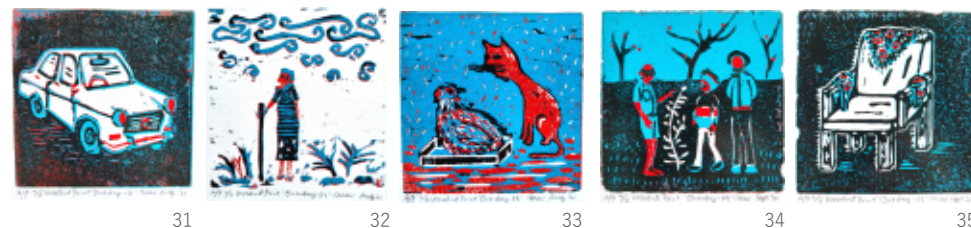
—そうでしたか。

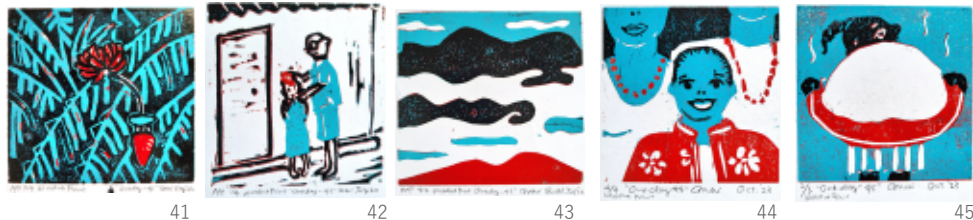
あそこで小さいのが売れたので。私と同じ10cm×10cmなので、小さいのも慣れてもらったと思うんです。—木版画は普及させやすいのがメリットなので、小さい作品で幅広くいろんな人に持っていただくのは大事ですね。

10月というタイミングも良かったみたいで、クリスマスのギフトに。フランスのご家族とか、いろんな国の方たちが、私のインスタグラムを見て来てくださったんです。本当に面白い経験をしました。

—それはよい展覧会でしたね。

版画教室も、昔はお子さんたちが来てくださったんですけど、一度ちょっと日本にいないといけな時期





があって、休みが長かったものですから、そのあいだにいつも来ていた日本人の方たちが本帰国されたりして、いまは日本の方は少ないんですけど、いろんな国の方が来てくださって、すごく刺激になりますね。

ーとてもユニークで、地に足のついた活動をされていますね。

本当にね、いろいろ刺激になります。その芸術家村は、いろんな動物がいて、ニワトリも来るし、野良猫も入って来るし、犬を連れて来る生徒さんもいるし、アヒルとウサギも増えたんですよ。

ー生きものだらけですね。

すごく面白い環境で木版画教室をしています。

クオナ・アーティスト・コレクティブ

ー芸術家村の場所はナイロビですか。

ナイロビの住宅街です。私がワークショップに参加したときは「クオナ・トラスト」だったんですけど、マネージメントもいろんな問題がありまして、いまはトラストがなくなって「クオナ・アーティスト・コレクティブ」と言っています。コンテナがたくさんあっていて、アトリエになっているんです。

ーコンテナは暑くないんですか。

そんなに暑くないですね。風通しが良くて。ナイロビ自体、そんなに暑くないです。標高が1700mあっ

て、よく比べられるのが軽井沢と同じなので、エアコンがいらななんです。コンテナはあんまりメンテナンスされてないんですけど。頓着しないものですから。

ー芸術家村は、自由に使えるのが良いんですね。

いまは私の娘がここで活動していて。Patti Endoと言うんですけど、私、本当にパティ・スミスが好きで、娘が生まれた日に、パティ・スミスが初来日のライブをしていたんですよ。出産した日なので行けなくて、パティと名前をつけて(笑)。彼女は人の顔を抽象的に描くんです。ケニアの老舗のバッグ屋さんと一緒に、彼女のデザインの商品ができています。

ーケニアは、アーティストが暮らしやすいですか。

昔はやっぱりたいへんでした。最近になって、援助する方が増えて、モチベーションが高くなったんですね。作品を買ってくださる方がいたり、ご自分の国に招聘して彼らの展覧会をしたり。ケニアの作品がケニアの外に行く機会が増えました。

ーケニア国内で完結していないんですね。

今まではそうだったんですけど、国外に出ていくアーティストが多くなりました。それをサポートして下さる方が、すごく増えたように思います。そういうチャンスは多いです。それはすごく良いことだと思います。この子の作品はちょっと良いなと思うと、目をつけられるんですよ。

ーそうですね。



ケニアのアートは2種類あって、いわゆるアフリカン・アートみたいなカテゴリが暗黙の了解であって。割とブラック・アフリカを描く。それをアフリカのアートとして、喜ぶ方が多いんですよ。

ーそれは国外ですか。

国内の外国人の方です。加えて国内のケニアの方も愛国心というか、私たちはブラックだという意識が高いので、それを描くのがアフリカのアートというのがあるんですよ。

ー若い人たちはまた違う感覚なのでしょうか。

ところがそうでもないんです。やっぱりブラック・アフリカを描く方が、反応がいいんですよ。

ーもうひとつのアートの傾向は、どういうものですか。

全然関係のない、抽象とか、インスタレーションとか。インスタレーションにしても、根底にはアフリカの歴史がテーマにあったりしますけれども。ブラック・アフリカを描いた方が、みんなに喜ばれます。

ーなるほど。

私が描く作品が、ケニアの人にどういふに捉えられるのか、ちょっと面白いんですけどね。このシリーズに関しては、FacebookやInstagramに、こういう絵なんです、という話を載せていたので、版画の作品がどういふよりも、話が面白かったという人はいたんです。私がそういう生活をしていんだと興味を持ってくれるアーティストは結構いました。ケニアの方で。

ー視覚的な作品とあまり結びついていない。

いないと思います。自分に近いという親近感を持てたということで、なんだ、そうだったの、という感じがすよね。まだ、みんな私が何かわかっていないですし、こんなふうに話す機会はないじゃないですか。あのシリーズは自伝じゃないですけど、私がどういう人なのかというのは、ケニアの人にわかってもらえるきっかけになると思うんですけどね。

ーそうした物語が強いビジュアル・イメージといっしょに記憶に残るのが、遠藤さんの作品の面白いところですね。

ケニアの人の手に渡ったときに、どういう反応してくれるか、すごく楽しみなんです。

ーいわゆるブラック・アートとは違いますよね。

全然違いますから、どんなふうに捉えてくれるかなと思って。展示したことがないので、ケニアでは実物を見た人はいないんです、家族以外。

ーその機会は、これから予定されているんですか。

もしかしたら出版された作品集を見て、機会が来るかもしれませんけど。自分でやった方が、そういうチャンスは早く来るかもしれません。

ー無国籍風というか、現実ではない夢のような感じもあるじゃないですか。僕は写真を見せていただいたときに、あらためて、これはアフリカの本当の話なんだと実感しました。

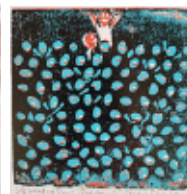




61



62



63



64

それはちょっと嬉しいですね。無国籍というのは嬉しいですね。

版画を彫るときに聴くのはヘヴィメタルです

一創作の力というか、芸術は具体的な現実のできごとから、飛ぶじゃないですか。僕は芸術は現実の先へ飛ぶのが大事だと思っているので。遠藤さんの版画は、飛んでいる(笑)。

飛ぶんですね……

一その人じゃないと飛んでいけない世界があるじゃないですか。誰もが同じじゃない。芸術はそういうものだと思うので。

絵柄が浮かぶのは、洗濯しているときとか。

一いま浮かんできたっていう感じになるんですか。

シャワーが終わって、湯船から出るときとか。一瞬ですよ。一日考えていると、つまらない画像が思い浮かぶんですけど、本当にコップを持ったときとか、コーヒー2杯目とか、ぱっと思ったときに、私の好きな画像が浮かびます。それがいつそうなるのか、よくわからないですね、頭のなかの構造がね。

一でも、それを逃がさない。

逃がせないくらい、焼きついちゃうんです。

一消えない。

消えないから、早く描いておこうとか、そういうことはしないで、ずっと残っているから、それを下絵にして彫りはじめる。

一へええ。

庭に出て鳥の声を聞いたときに、何かを思いつくことは多いです。鳥の声はすごく助けになるんです。ちょっと悩んでいるときとか、嫌なことがあったときに、

庭に出て鳥がピーッと鳴いたらそれで悩みが消えちゃう。本当に鳥って、あんなに小さい身体なのに、すごく大きな声なんですよ。

一ケニアの鳥って、どんな鳥ですか。

私ね、名前とかよくわからないんですけど。

一スズメではない。

スズメもいます。この前、私が近付いても逃げなかったのは、メジロ。本当にメジロかはわからないんですけど、でもメジロ。あの色で、大ききさ的にも。ペアでいて、私が近寄ってもそこにじっとしてくれたんですよ。目のまわりも白かったし、メジロだと思うんですけど。

一そうしたときに作品がふっと湧いてくる。

はい。でもメジロの作品じゃないんですけど。音が結構多いですよ。

一音に敏感なんでしょうか。

そんなに敏感とは思っていないんですけど、好きなんですよ。

一音からビジュアル・イメージが浮かんでくる。

そうです、そうです。ちなみに、版画を彫っているときに聴いている音楽はヘヴィメタルです。

一全然イメージできないですね(笑)。

結構、早くやりたいんですよ。特に彫るときはメタルじゃないと力が出ない(笑)。

一破壊的な衝動が必要(笑)。

粗削りじゃないですか。よく見ると、線とかまっすぐじゃないし、目もきれいな丸じゃないし。

一ほどよい粗さというか、エネルギッシュな感じ。

うまく言えばエネルギッシュなんですけど、メタルです。

(2025年3月25日 NANAWATAにて)

まとめ 岡村幸宣

Mari Endo えんどう まり

1959年東京生まれ。1982年桑沢デザイン研究所ビジュアルデザインコース II 部卒。1988年アフリカの文化を学ぶためケニア首都ナイロビの日本アフリカ文化交流協会に留学。夫の出身地であるケニア第3の都市キスムに約1年滞在した後、ケニアおよびタンザニアで日本企業の現地職員としてマネージメントに従事。2007年現 Kuona Artists Collective (旧 Kuona Trust) で習得した彫り進み多色木版画*の技能を生かし、2014年定年退職後、ケニアを拠点に版画家・墨イラストレーターおよびエデュケーターとして活動している。

*彫り進み木版画: 1枚の版木で彫りと刷りを色を変えながら繰り返し、多色刷りの版画を作る技法。版木はどんどん削られ凸部分が変化するので1色目を刷った枚数のみがエディションとなり刷り増しはできない。

個展

2022年10月 “ある日のこと” (北海道十勝・Art Labo 北舟)

2023年4月 “ある日のこと” (東京・Gallery Nayuta)

2024年4月 “ある日のこと II” (東京・Gallery Nayuta)

参加したグループ展

2015年9月 “John Silver & Mari Endo” (ナイロビ・Karen Country Club)

2017年11月 “ケニアアートフェア” (ナイロビ・Sarit Centre)

2018年12月 “第6回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ 2018” (東京・多摩美術大学美術館)

2019年2月 “The 7th Guanlan International Print Biennial China 2019” (中国・深圳市)

2019年9月 “Prints by Selected Artists” (ナイロビ・One Off Gallery)

2020年6月 “International Virtual Engraving Printmaking Biennial” (イスタンブール)

2020年7月 “Covid 19 – Social Distancing” (ナイロビ・One Off Gallery)

2021年12月 “Tiny works Christmas Show” (ナイロビ・One Off Gallery)

2022年3月 “Art Affair” (ナイロビ・One Off Gallery)

2022年4月 “Prints, Limited Iterations” (ナイロビ・One Off Gallery)

2023年3月 “2023 国際婦人デー展覧会—Her Story” (ナイロビ・フランス文化センター)

2023年5月 “迷想と恍惚2—その世界を見つめる” (京都・ギャラリー グリーンアンドガーデン)

2024年6月 “むぎのときいたる” ときかご画廊初夏展 (大阪・アイギャラリー)

2024年8月 “美を纏う—星空の下で—極北星奇譚 ときかご画廊 TG02 (裏小樽・モンパルナス)

2025年1月 恵比寿映像祭 2025 地域連携プログラム “My Own Journal わたしのジャーナル” (東京・AL TOKYO)

企画した展覧会

2024年10月 木版画教室生徒作品展 “Small small exhibition” (ナイロビ・Kuona Artist Collective)

常設展

2019年4月～ Shokudo Japanese Café/Restaurant (ナイロビ)

Award 賞歴

2018年 第6回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ 2018 入選

Public Collection 版画作品所蔵美術館

Tama Art University, Tokyo, Japan 東京都多摩美術大学美術館

China Printmaking Museum, Shenzhen, China 中国深圳市中国版画美術館

Contact: mari.otiendo@gmail.com Instagram: rockingmariendo

一枚の板があれば制作でき、技術の巧拙にかかわらず味わいの深い表現を生み出すことのできる木版画は、学校教育の現場などで、日常生活風景を題材にして取り組む表現の実践として活用されてきた歴史がある。

たとえば、2021 年に国立ハンセン病資料館で開催された企画展『『青い芽』の版画展—多磨全生園の中学生が彫った「日常」の風景—』を思い浮べる。国立療養所多磨全生園にかつて存在した中学校分教室の卒業文集『青い芽』に収録された、中学校による木版画だ。ハンセン病の特効薬が開発され、治癒後の社会復帰が可能になった時代、1950 年代後半から分教室が閉園する1979 年まで、学生たちは卒業と退園の前に、ほとんど写真記録が残されない学校生活の記憶を刻みこむように、版画制作に取り組んでいた。

木造校舎の教室、廊下、少年寮、神社、樹などの風景。新学級の教科書の配布から、身体検査、体力測定、トーテムポールの完成、学習発表会、ストーブの取り付け、文集発行、卒業式といった一年間の学校生活。そして卒業旅行の思い出など。



そうした豊かな表現に心を揺さぶられたのは、誰のためでもない、自分自身のための表現であると感じられたせいかもしれない。

彫るという行為は、描くよりも不自由であり時間もかかるが、その手間の分だけ、記憶への強い意思を込めることができる。

Mari Endo さんがパンデミックを契機に、アフリカで暮らしはじめた頃の忘れがたい日々——ケニア西部の都市キスムの記憶を呼び起こそうと考えたのは、版画というメディアの特性と合致している。電気もガスも水道もなく、長い伝統的な暮らしの知恵を受け継ぎながら生きてきた地域の人たちとともに過ごした豊かな記憶は、板にイメージを彫り進め、インクを乗せて紙に写しとるというシンプルな手わざを繰り返すことによって、鮮やかによみがえる。白地に青、赤、黒という限定された色彩と、素朴で力強い造形は、影絵芝居のように物語を立ちあげて、観る者をはるかに遠い土地まで誘う。

全部で 64 点の版画連作「ある日のこと」には、それぞれ短い物語が添えられている。たとえば、こんな感じだ。

ある日のこと -1

フローレンスはママに言われた通り市場でトマトを買って、ひとつも落とさず家に帰ることができました。

ある日のこと -2

ヘズボーンが学校から帰って一番はじめにすることは、犬のシンバの頭を撫でることです。

ある日のこと -3

雨が降り出したらすぐ家の中に入りなさい、でないとマラリアになるんだよ。外で雨を見るのが好きな私はいつもママに叱られていました。

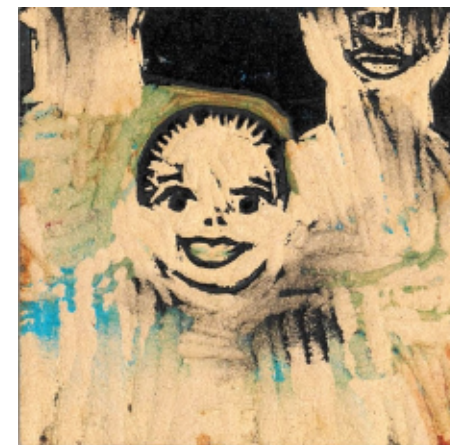
こうした短い物語は、Endo さんが経験したアフリカの暮らしの断片を伝えてくれる。もっとも、全体として時系列に沿った筋書が構築されているわけではない。フローレンやヘズボーンたち、つまり登場人物のひとりひとりが何者なのか、最後まで解き明かされるわけでもない。不意にあらわれてきた一瞬の記憶を、そのまま、さっとつかまえたような感覚の物語だろうか。

彫り進み版画とは、一枚の版木で彫りと刷りを色を変えながら繰り返し、多色刷りの版画をつくる技法である。色を変えるたびに版木はどんどん削られて、凸部が変化していくから、二度と刷り直しができない。頭のなかでイメージした通りに彫り進めても、誤って凸部を削り取ってしまったら、もう後戻りができない。版の色がずれてしまっても、最初からやりなおすことはできない。良く言えば大らかな表現、別の言い方をすれば精度を極めるような考えを捨てて、常に前を向いて進んで行くしかないような技法である。

提供していただいた実際の版木を撮影し、両側の頁に掲載しているのは、その熱と勢いを感じてほしいと思ったからだ。

今回の展覧会にあわせて発行した作品集『ある日のこと』に掲載した作品と、実際に会場に展示をしている（『NANAWATA NOTE 23』に収録している）作品は、限定番号（Edition）が異なっている。だから、よく観ると細部の発色や重なり具合が、どれもちよつとずつ違っている。版画ではあるけれど、完全な複製とはいえないものだ。けれども、その不完全さが心地よい。

Endo さんの版画の特徴なのは、紙の地色も含めると 4 色を組み合わせた画面のなかで、登場人物たちを示す色彩が、かならずしもひとつの色に



統一されていないことだ。アフリカ人＝黒、という固定観念から解き放たれて、パバ（スワヒリ語でお父さん）もママもプリシラも、レベッカばあちゃんもジミーおじさんも、いつかどこかで出会ったかもしれない、なつかしい人たちのように思えてくる。ママの飼っている 10 匹の山羊も、犬も猫もニワトリも牛も、野生のカバもワニもインパラも、ヴィクトリア湖のティラピアも、ニャワワというオバケも、きっと、そんななつかしい何ものかであったにちがいない。人間と、人間でない命がとなりあって、ともに生きていた日の記憶。10cm 四方の木版画の画面にひそむ物語は、そうした小さな民話なのだと思う。

（岡村幸宣）

NANAWATA NOTE 23

2025 年 8 月 20 日 発行

NANAWATA BOOKS

350-0056 埼玉県川越市松江町 2-4-4

電話 049-237-7707 FAX 049-237-7708

メール info@nanawata.com

ウェブサイト <https://nanawata.com>